

太陽誘電株式会社
2023 年3月期第3四半期決算説明会 質疑応答要旨
(2023 年2月7日開催)

- Q1. 第3四半期以降の MLCC の稼働率と在庫変動、用途別動向は。
- A1. MLCC の稼働率は第3四半期が 60-65%で、第4四半期は 50%前後を想定している。
第3四半期の全社ベースの在庫は9月末から 11 億円削減した。第4四半期はさらに 70-80 億円削減し、期末では前期末比で 65-75 億円増加する見込み。
MLCC の用途別動向は、第3四半期は前四半期比で通信機器、自動車向けが増加、民生機器、情報機器、情報インフラ・産業機器向けは減少した。第4四半期は、前四半期比で自動車向けは引き続き増加、情報インフラ・産業機器向けは微増、その他の用途分野向けは減少と見ている。各市場の在庫調整は第4四半期で終了する見込みであることから、来期第1四半期からの緩やかな上昇を期待している。
- Q2. 来期第1四半期が第4四半期と同程度の売上となった場合、営業利益の水準はどのようになるのか。
- A2. 第4四半期は営業利益が 51 億円の赤字想定だが、在庫削減をしなければブレイクイーブンとなる水準。第1四半期は第4四半期から若干増収となれば、その分増益となる。また、大型品の増加による製品ミックス改善も期待される。
- Q3. MLCC の販売価格下落は進んでいるのか。第4四半期以降の見通しは。
- A3. 通信機器向けの小型品などはやや値下がりしているが、自動車向けなどの大型品は依然緩やかな値下がり。第4四半期もこの傾向が継続すると見ている。当社が手掛けているハイエンド・高信頼品は大幅な値下がりはないと考えている。
- Q4. 第3四半期に対する第4四半期の営業利益増減要因は。
- A4. 操業度効果と販売価格影響、為替変動が減益要因となる。第4四半期は前四半期に対し 110 億円の減収、70-80 億円の在庫削減があることから操業度効果と販売価格影響を合わせて 76 億円の減益を見込んでいる。また、第4四半期の為替前提は1米ドル 130 円で前四半期から 14 円円高になることから、為替変動が 43 億円の減益要因となる。一方、固定費は3億円抑制され、増益要因となる。
- Q5. MLCC の稼働率のボトムと、再び稼働率が上昇するタイミングは。
- A5. 第4四半期の稼働率 50%前後がボトムとなり、来期第1四半期にかけて上がっていくと考えている。

- Q6. 為替影響を除いた第4四半期の MLCC 売上イメージは。
- A6. 第4四半期の全社の売上高は前四半期から 110 億円の減収となる計画だが、この内約半分が為替変動による影響、残る半分が実質的な減収と想定している。MLCC の売上に対する為替変動の影響は、半分よりもやや大きい。
- Q7. 需要環境が悪化している中で新工場を建設中だが、今後の投資計画に変更はないのか。
- A7. 今後の生産能力増強計画に大きな変更はない。足元の需要環境は在庫調整も重なって低調であるものの、今後、大型品や高信頼性品を中心に需要が拡大していくという見通しに変化はない。こうしたアイテムを中心に、中期的な需要増を見据えた設備投資を行い、生産能力を拡大していく。
- Q8. 第4四半期の通信デバイスの売上想定は。
- A8. 通信デバイスは、中国スマホの影響により第3四半期から第4四半期にかけて減収する見込み。今後は需要の回復や新製品の拡販効果による売上の拡大を期待している。
- Q9. 来期の固定費はどのように設計しているのか。
- A9. 現在、来期計画を策定中である。極力固定費を抑制しながら、効率よく生産能力を拡大していきたい。

※当資料に記載されている、当社(太陽誘電株式会社、および当社グループ)に関する計画、業績見通し、戦略、確信等のうち、将来の記述をはじめとする歴史的事実ではないものは、すべて現在、当社が入手している情報に基づいて行った予測、想定、認識等を基礎として記載しているものであり、その性質上、客観的に正確であるという保証、ならびに将来その通りに実現するという保証はありません。実際の業績は、数々の要素により、現状の見通し等とは大きく異なる結果となりえ、かつ、当社が事業活動の中心とするエレクトロニクス市場は変動性が激しいことから、当資料に全面的に依拠することはお控えくださるようお願いいたします。